

# 樋口一葉の身体描写の研究

長 峰 麻 衣

## 一 はじめに

樋口一葉について今までにも多くの研究が行われている。明治二十年代の言文一致の流れや、新しい時代の社会矛盾の中で、彼女は短い人生を生き、名作といわれる作品を残した。樋口一葉は、近代女性作家の源流と言われ、日本最初の女流職業作家である。近代の女流作家について書かれた論文にも、「一葉以前」「一葉以降」と表現されることもあり、一葉は近代女性文学の一つの区切りともいえる作家だろう。

一葉の小説作品の主人公には女性が多く、一葉の過ごした環境によって、主人公の境遇や身分も変わってくる。男性の登場人物は女性ほど重視されていないようだが、実際の生活環境やモデルとなる実在の人物の存在によって、一葉が描いた人物はより細かい描写がされるのではないだろうか。

まがひも無き大黒屋の美登利なれど、誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田、結綿のやうに絞り放しふさくと懸けて、鼈甲のさし込み、総つきの花かんざしひらめかして

（『たけくらべ』女性描写）

二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり

（『にこりえ』女性描写）

十五の春より不了簡をはじめぬ、男振にがみありて利発らしき眼ざし、色は黒けれど好き様子とて四隣の娘どもが風説も聞えけれど

（『大つごもり』男性描写）

明治の小説では、衣装や身のまわりの物を丁寧に書き込む文章が普通であったという。当時の読者は、このような風俗の描写によってイメージを膨らまし、活き活きとした人物像を作り上げた。

一葉の文章表現は美しく特徴的であり、中でも身体描写は細かいところまで描かれている。そのため、樋口一葉の研究において身体描写を視点とすることは意義のあることだと考える。女性描写に限定した研究は多くあるが、その女性描写の特徴をより明らかにし、一葉の身体描写の特徴を知るためにも、男性の身体描写と比較して調査する。人物描写には感情や心理状態を表わす内面描写と、表情や容貌、身振りなどを表わす外面描写がある。女性と男性の身体描写では、注目する部位が異なるのか、表現方法などに注目しながら考察を進めていきたい。

## 二 分析方法

本稿の研究に使用する作品のジャンルは、日記や和歌などは対象とせず、樋口一葉の小説作品に限定する。彼女の小説作品は全二十二作品ある（習作『かれ尾花一もと』は含まない）。宅野美穂氏の卒業論文を参考に、『新日本古典文学大系明治編 24』（管聡子・関礼子校注 平成十三年 岩波書店）を使用した<sup>1</sup>が、その中に収録されていない6作品については『全集 樋口一葉① 小説編一』（前田愛 昭和五十四年九月 小学館）を使用した。そのため本文中にある用例に付けたページ数は各参考文献におけるページ数となっている。対象となる作品から登場人物の身体描写を採

録し、身体描写を「肩」「手」「足」など十一ヶ所の部位に分類する。その結果の数値から、樋口一葉が身体描写においてどこを重視し、どのように表現しているのかが考察される。次に挙げる例文のように、一つの文に複数の描写が見られる場合は部位ごとに確認していく。

横ぶとりして背ひく、頭の形は才鎚とて首みぢかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反歯の三五郎といふ仇名おもふべし  
（『たけくらべ』 男性描写）

お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの髻の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちゃん先刻の手紙お出しかといふ  
（『にこりえ』 女性描写）

米沢数奇屋の肌つき美しくしき人、黒繻子の帯腰つきすつきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根がけの好み  
（『うもれ木』 女性描写）

分類した身体描写をさらに男性の描写と女性の描写に分類する。その結果の数値と用例から、樋口一葉が身体描写において男女の表現でどのような区別をしていたのか考察する。

身体描写の分類は以下の通りである。

- ① 肩
- ② 胸 (乳房等)
- ③ 背
- ④ 腹 (胎内等)
- ⑤ 腰
- ⑥ 臀
- ⑦ 腕 (肘、脇の下等)
- ⑧ 手 (指さす、拳等)
- ⑨ 足 (膝、足もと等)
- ⑩ 体 (体型、骨格、身長、姿等)
- ⑪ 肌 (色白い、薄化粧等)

直接「手」「足」等の単語が出てくるものを採録したが、その他に文脈から判断して採録した表現は、( ) 内に記した。

男性の描写、女性の描写、その他の描写の三つに分類する際、「その他」の分類には、性別が確認できないものや、男女ともに関する描写を含む。女性描写と男性描写の表現方法を探るため、部位ごとに考察を行っていく。

### 三 分類結果

・身体描写の分類結果

うつけみ	軒もる月	ゆく雲	大つごもり	暗夜	花ごもり	琴の音	雪の日	暁月夜	うもれ木	経づくえ	五月雨	別れ霜	たま櫓	闇桜	
0	0	2	2	3	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	肩
3	1	2	1	1	1	1	1	4	6	1	3	1	0	2	胸
1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	背中
0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	腹
0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	0	0	1	0	0	腰
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	臀
0	0	0	0	3	1	0	0	3	8	0	0	4	1	0	腕
5	5	3	6	19	3	3	0	12	26	4	8	17	6	5	手
7	5	5	5	10	3	0	0	3	3	2	3	11	5	0	足
15	4	8	11	13	5	3	1	13	18	6	12	31	18	8	体
4	1	0	3	2	1	0	0	2	6	0	2	5	0	0	肌
35	17	21	29	52	14	9	2	38	71	15	28	72	31	17	作品別計 合計

部位別合計	われから	裏紫	この子	わかれ道	たけくらべ	十三夜	にぎりえ	
21	2	0	1	2	3	0	2	肩
39	4	2	0	0	3	0	2	胸
20	2	1	0	3	5	0	2	背中
13	2	0	0	0	5	0	2	腹
12	3	0	0	0	3	0	1	腰
0	0	0	0	0	0	0	0	臀
24	1	0	0	0	2	1	0	腕
198	16	3	5	10	24	4	14	手
103	3	0	1	3	21	1	12	足
257	19	3	0	8	33	7	21	体
51	8	0	2	0	5	3	7	肌
738	60	9	9	26	104	16	63	作品別合計

・身体描写の男女別分類結果

部位別合計	その他	男性描写	女性描写	
21	1	14	6	肩
39	0	9	30	胸
20	1	8	11	背中
13	0	5	8	腹
12	2	3	7	腰
0	0	0	0	臀
24	0	16	8	腕
198	19	92	87	手
103	10	52	41	足
257	9	105	143	体
51	0	15	36	肌
738	42	319	377	作品別合計

## 四 部位別考察

分類結果をもとに、例文を挙げながら部位別に考察を行っていく。各部位には用例数と部位別使用率を記す。部位別使用率＝部位別合計÷総合計×100（少数点第二位以下切り捨て）とし、顔面描写と身体描写に分けて計算した。各用例の後に記した（ ）内は、上から順に作品名・ページ数・行数である。

### ・身体描写の部位別考察

#### ① 肩

登場回数：21回

使用率：2.8%

「肩」の描写は女性描写に6例、男性描写に14例、その他に1例見られ、男性描写のほうが多い。

肩幅のありて背のいかにも高さ処より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく  
（にぎりえ・259・8）

「肩」の外見的特徴を表わす描写は、「肩幅」の広さ・狭さを表現したもの、「怒り肩」というものだけであった。しかし「肩幅せばく」「怒り肩」「大幅の肩」といった容姿描写は女性描写には

見られない。男性描写の特徴として挙げられるだろう。

金をとくす此頃の暑さに、こちたき髪のうるさやと洗しけるは今朝、おのづからの緑した、らん計なるが肩にかゝりて、こぼる、幾筋の雪はづかしき頬にかゝれるほど

(暗夜・64・14)

また、「髪が肩にかかる」「手を肩にかける」「肩に置き手拭」のように、「肩」以外の身体部位や物と一緒に描かれる用例が見られた。

顧みられて我が形はづるとなけれど、快よからねば洗ひざらしの浴衣の肩、我れ知らず窄めて小走りするお蝶、並らぶ縁日の小間もの店に目もくれず、そゝぐは一心兄の上ばかり

(うもれ木・119・15)

「肩を窄める」「肩をゆする」といった動作の描写もみられた。そこには恥ずかしがる様子や悔しがる様子といった感情が表現されている。一葉は身体の特徴の一つとして「肩」の描写をしているが、感情を表現する部位としても「肩」を使用していたと考えられる。女性描写では「肩を窄める」という動作描写や、「髪が肩にかゝる」「肩を打つ人あり」のような受動的な動作描写が見られたが、これは男性描写にも見られる。「肩」は男性の外見の描写によって体格を表わす部位として重視されたと考えられる。

## ② 胸

登場回数：39回

使用率：5.2%

「胸」という単語が入っていても、「胸をこがす」「胸さわぎ」といった慣用表現は調査の対象外とした。「胸」の描写は女性描写に30例、男性描写に9例見られ、女性描写のほうが三倍以上用例数が多い。

一盞二盞は逃れがたければ、いつしか耳の根あつう成りて、  
胸の動悸のくるしう成るに  
(われから・366・3)

「胸の動悸」「胸が痛い」「胸ぐるしい」のように、「胸」の状態を表わす描写が多く見られた。お酒を呑んで体調が変化した様子や病気の容体を描写したものであった。また、驚きや緊張が「胸」の状態の変化に表現される用例も見うけられた。

君はおのづから君の本地にありて其島田をば丸曲にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に含まする時もあるべし  
(ゆく雲・210・3)

「乳房」という表現も「胸」の描写に含めた。女性にのみ見られる描写で、その中に細かい描写は見られなかった。女性描写の用例が多く見られる理由としてこの「乳房」の描写が挙げられる。

「うつくしき乳房を可愛き人に含まする」「小児に添へ乳の美しくきさま」のように母性を表現するために使用されている。また、「癢」という胸部・腹部に起こる激しい痛みがある女性に多い病気があり、それも用例の多くなった要因としてあげられる。

頸もと計の白粉も栄えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すばく長烟管に立膝の無沙法さも咎める人のなきこそよけれ

(にこりえ・234・5)

この「胸をくつろげる」という動作描写は着物をだらしなく着崩した様子を描写した表現で、人物の外見を想像しやすいものにする。

調査の対象外とした慣用表現のほうに、感情や内面を表現する描写が多くみられた。一葉は感情を表現するために「胸」という言葉は使用したが、その他の用例は慣用的なものが多く、独自の表現とは考えにくいものが多かった。

### ③ 背中

登場回数…20回

使用率…2.7%

「背」の描写は女性描写に11例、男性描写に8例、その他の描写

は1例見られる。

気が付きましたかへと脊を撫でられて、母の膝の上にすゝり泣きの声ひく、聞えぬ

(うつせみ・221・3)

「脊を撫でる」「脊を撫でられる」といった描写が多く見られた。「背」の描写には女性描写のほうが多いが、そのほとんどがこのような受動的な動作の描写であった

寄かゝりし柱に脊を擦りながら、あゝ詰らない面白くない

(わかれ道・326・7)

「背」自体の動作の描写は「脊を擦る」というものだけであった。かゝりけれども猶ほ一片誠忠の心は雲ともならず、霞とも消えず、流石に顧りみるその折々は、慚愧の汗背に流れて、後悔の念胸を刺つ、

(たま櫛・73・11)

「汗が背に流れる」という描写は2例見られ、両方とも男性の描写であった。「背」だけで感情を表わす表現は無かったが、「汗」には人物の感情が表現される。「慚愧の汗」は自分の行動を恥じる感情、「背に汗の流るぞ苦るしき」は緊張や恥ずかしさの感情が汗となつて「背」を流れる。「背」という他人からは見えない部位に自分の感情を表現する「汗」の描写をするのは、感情を隠したいと思う男性の様子を表わしているのではないだろうか。

「背中」の外見的特徴を描写したものは無く、動作の描写も少な

いことから、「背をなでる」といった受動的な動作によって人物同士の間接的な関係を表わすために使用された部位であったと思われる。

#### ④ 腹

登場回数：13回

使用率：1.7%

「腹がたつ」「腸が煮える」といった怒りの感情を表わす表現は、慣用表現であると判断して分類に含めていない。「腹」の描写は女性描写に8例、男性描写に5例見られる。

涙をつゝみて宿に下りし此子胎内にやどりて漸く七月、主様うせての二七日なりける  
(暗夜・69・10)

「腹」の分類には「胎内」という表現も含めた。「胎内」という意味で使用される「腹」の描写は女性にのみ見られ、最も多い用法であった。

あれ丈腹の太い豪いものでは有らうが、考へると此処の旦那も鬼の性さ  
(われから・376・12)

龍華寺の大和尚身代と共に肥へ太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なるほめ言葉を参らせたらばよかるべき  
(たけくらべ・155・13)

外見の特徴として「腹の太い」「肥へ太りたる腹」という描写が

2例あった。これは両方とも男性の描写であり、外見の描写の中に裕福な生活を送っていることを表わす表現である。『たけくらべ』の用例では「腹」の肌の色つやの描写もあり、細かい部分まで描写されている。男性にのみ見られる描写には他に「切腹」の描写で男らしい行動として描かれているものがあった。

「腹」の動作描写は見られず、感情の表現も一葉の特徴といえるものではないため、身体描写において特に重点を置いた部位ではないと思われる。

#### ⑤ 腰

登場回数：12回

使用率：1.6%

「腰」の描写は女性描写に7例、男性描写に3例、その他に2例見られる。

庭を出で、池の石橋を渡つて築山の背後の、お稻荷さまが社前なるお賽銭箱へ仮初に腰をかけぬ  
(われから・366・5)

「腰をかける」という用例は5例と多かった。動作の描写ではあるが慣用的な表現であり、一葉の特徴となるような描写ではない。鶯が生んだるおたかとして、今年二八のつばみの花、色ゆたかにして匂濃やかに、「天晴れ当代の小町、衣通ひめと、世間に

出さぬも道理か、荒き風に当りもせば、あの柳腰なにとせん」  
と仇口にさへ噂し連れて  
(別れ霜・19・8)

外見の描写では「柳腰」「腰つきすつきりとして」の2例が見られた。これは女性にのみ見られる描写の用法で、外見に女性らしさが描写されたものである。体つきの様子を補足する意味をもち、読者が人物を想像する際に手助けになるような描写である。

玉のやうな涕はらく、はては大声にわつと泣き出す、身内  
や痛からん筒袖の処々引さかれて背中も腰も砂まぶれ  
(たけくらべ・142・15)

「腰」の状態として、「砂まぶれ」「鎌を腰にさして」などの描写があった。これらは人物の状態を描写した表現である。

感情を表現するような描写はみられなかったが、身体描写のなかでも人物の状態をより細かく描写できる部位として使用されていたと思われる。

#### ⑥ 臀

登場回数：0回

使用率：0%

「臀」の描写は1例も無かった。人物の描写において一葉は重要視していなかったのだろう。林七重氏の卒業論文「谷崎潤一郎の

女性描写——身体描写の視点から——」でも「臀」の用例は最も少ないが、女性らしい容姿描写がされており、注目度は低いものの女性らしさを描こうとした谷崎の姿勢が見られるとしている。作家によって注目される部位は異なるが、男性作家・女性作家の視点の違いが表われた部位と言えるかもしれない。

#### ⑦ 腕

登場回数：24回

使用率：3.2%

「腕」の描写は女性描写に8例、男性描写に16例見られ、男性描写のほうが多い。

令嬢が鎌倉ごもりの噂、聞く胸とろきて敏しはしは呆れしが、猶甚之助に委しく問へば、相違なき物語半は泣きながらにて、「何卒お廃めになる様な工風はなきか」と頼まれて、さても何とせん、組む腕の思案にも能はず

(暁月夜・169・2)

「思案する」という意味で使用される「腕を組む」という動作描写は6例あった。慣用的な表現であり、一葉独自のものとは考えにくい。が、「腕組み」の描写は男性描写にのみ6例見られ、男性特有の動作といえるのではないだろうか。その他の動作描写では、



男性には「振あぐる手の肘を止めて」のように体全体の動きが想像できるような大きな動作の描写があるが、女性の動作描写には「肘を寄せたる丸窓」「玉の腕に此文を抱き」など、動作として大きなものは見られないことが特徴として挙げられる。

信如もふつと振返りて、此れも無言に脇を流る、冷汗、跣足に成りて逃げ出したき思ひなり (たけくらべ・168・12)

「脇を流る、冷汗」「汗腋下を伝へば」という表現は2例見られた。人物の緊張の様子を「汗」とあわせて表現している。

どつかと座す花瓶の前、あふれ出る熱涙はらひもあへず、にらみつむる眼光火と散つて、取りしむる腕、「くだけよこの骨

(うもれ木・145・2)

「取りしむる腕」という描写は2例あった。「腕を握り締める」動作で、怒りや悲憤といった感情を表現している。一葉は「腕」を外見の描写だけでなく、感情を表現することができる部位であると考えていたと思われる。「脇を流る、冷汗」という表現や「取りしむる腕」のような感情の描写は男性描写にのみ見られ、女性描写には見られない。

病みつかれても老の一徹、上りがまちに泣きくづはれしお高が細腕むづと取りつ、力を極めて押出す門口

(別れ霜・52・6)

外見の描写では「細腕」「痩せ腕」のように、腕の細さの描写のみ3例見られた。「痩せる」という語のみで表現された状態描写は「体」の分類に入っている。それを「腕」の描写としている点から、体の様子の描写を補足するとともに、細く弱った様子を強調するための描写ではないかと考える。女性描写には「細腕」という表現が2例見られ、女性人物の描写においては体格の描写を強調して補助する役割があると考えられる。

#### ⑧手

登場回数：198回

使用率：26.8%

「手」の描写は女性描写に87例、男性描写に92例、その他は19例見られた。男性描写が多く、これは「手」の動作描写が多いことが関係していると考えられる。

例の脇道にかゝりし時、白く美しき手を直次が肩にかけつ、小作りに見ゆれど流石に男は丈の高きものかな

(暗夜・82・9)

「白く美しき手」のように「手」の外見の描写が見られる。「幽霊のやうに細く白き手」という描写も見られ、「手の白さ」の描写を重視していたようだ。これらは女性描写にのみ見られ、色の白

さと細さに女性らしさを表現したのではないだろうか。

あれ彼方に迎ひの車が来て居ます、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大いなる蛛の巣のかゝりて、朝日にかゞやきて金色の光ある物なりける  
(うつせみ・220・5)

「指さす」という動作の描写は多く見られた。人物の動きを表わし、物語の舞台の周辺に視線を移すときなどにも使用される。動作そのものを描写するとともに、「指をさされる」人物の描写に展開することもあった。

何うぞ御聞遊して屹となつて畳に手を突く時、はじめて一トしづく幾層の憂きを洩しそめぬ  
(十三夜・281・7)

父さまのお心よく取りて、松沢さまとの仲昔の通りにして欲し、これ一ツがお頼みぞ」とて両手を合せて伏し拝みぬ

(別れ霜・59・6)

「手を突く」「手を合せる」という動作の描写も見られた。「手を突く」という動作は、「手」のみ動作というよりも体全体の動作を描写した表現であり、人物の大きな動きを表わしている。

糸子ホ、と笑ひて、松野が膝に軽く手を置きつ、「戯むれかと問ふだけでも浅し、親とも兄ともなく大切に思ふものを」と、無心に言へば  
(たま櫛・69・4)

「膝に手を置く」という動作描写では、相手との関係や相手との

距離といった状況まで表現される。

草がくれ拳をにぎる意気地なさよりも、ふむべき為のかけはしに便りて、を、しく、たけく、栄えある勦を浮世の舞台にあらはすこそ面白けれ  
(花ごもり・37・6)

「拳をにぎる」という動作描写では、怒りや悔しさといった感情を表現している。慣用的な表現であり一葉の特徴とはいえないだろうが、身体描写によつて感情を表現するという役割をしている。男性の動作描写には、この「拳をにぎる」の他「腕手首ぶる」と顫へて」のように怒りの感情が表われた表現が見られる。女性描写にはこのように感情が「手」の描写に表われた表現は無く、男性にのみ見られた。動作描写は男女ともに見られるが、感情を描写した表現が男性にのみ見られるのは興味深い。

「手」の描写では動作描写が多く見られ、人物の動きを描写しやすい部位だと思われる。その中でも、単に動きを表現するだけでなく、相手の人物との関係や距離を表現したり、「指さ」された人物や景色の様子に物語りを展開させる用例もあった。外見の描写、感情を表現する描写もあることから、一葉は「手」の描写を重視していたのではないだろうか。

## ⑨足

登場回数：103回

使用率：13.9%

「足」の描写は女性描写に41例、男性描写に52例、その他に10例見られる。男性描写が多いのは、「手」の描写と同様に動作描写が増えるためだと思われる。

久し振にて御目にかゝりし、我身の願ひこれ一ツなり。叶へさせ給はゞ嬉しかるべきを」とて取次ぐ文の思ひ切りても、涙ほろほろ膝に落ちぬ（五月雨・91・6）

下を向いて在するに、見れば涙の露の玉、膝にこぼれて怪しう思はれぬ（われから・368・7）

「涙が膝に落ちる」という描写が見られた。「膝」という語だけでは感情の描写は難しいが、「涙」という語と一緒に使用することで哀しみの感情を表現する。なぜ「涙が落ちる」という表現だけで描写しないのか。座った状態で泣いているということ、涙を拭わずに泣いている状態を表わしているのではないだろうか。

何ごとにも中姉様と慕ひ寄れば、もとより物やさしき質の、これは又一段に可愛がりて、物さびしき雨の夜など、燈火の下に書物を開らき、膝に抱きて画を見せ

（暁月夜・156・6）

「足」の描写では「膝」という語がよく使用される。「膝に抱く」という表現は、人物同士の親しさと、距離の近さを表わす。「膝に手を置く」という表現にも同じことが言えるだろう。「母の膝へ寄添ひ」「母の膝に眠る」という女性の「膝」の描写は、人物のすぐ近くという意味以上に女性の包容力を表現する部位であると考えられる。

私の父といふは三つの歳に椽から落て片足あやしき風になりたれば（にぎりえ・261・9）

「足」の状態を表現する描写も見られたが、良い意味での用例は無く、「あやしき風」のように悪い意味で使用されていた。

往来は到底なきことかと落胆の耳に嬉しや足音、辱しと返り見れば、角燈の光り雪に映じ、巡廻の查公怪しげに目をそ、いで行き過ぎられし（別れ霜・34・15）

「足音」という描写も分類に含めた。直接「足」を表現してはいないが、物語の世界をより細かく表現し、状況などを表わす描写と考えられる。また、人物の存在や登場を表現するためにも使用されている。

男性の動作描写には「蹴かへす」「力足を踏みこむ」のように男性的な表現が見られた。「足」の外見を描写した表現はほとんど無いが、女性の描写で「足には塗り木履」と履物の描写があり、人物の姿をより詳細に描いている。

⑩ 体

登場回数…257回

使用率…34.8%

「体」の分類には「姿」「身」「形」といった語で表現されたものも含めた。ただし、身分や身の上を表わす「身」など身体描写とは関係ないと思われるものは除外した。「体」の描写は女性描写に143例、男性描写に105例、その他に9例見られ、女性描写のほうが多い。

何時の間に此処へは来て、今まで隠れてゐるものか。知らぬことゝて取乱せし姿見られしか、見られしに相違なし

(たま櫛・65・2)

詫るやうに慰められて、それでもと腕白も言へず、しくしく泣きに平常の元氣なくなりて、悄然とせし姿可憐し

(暁月夜・168・18)

「取乱せし姿」「悄然とせし姿」のような描写では、人物の様子を表現している。

お八重の膝に身をなげ伏して、隠くしもやらぬ口説ごとに、お八重われを忘れて抱き合ひ、詞もなくよゝと泣きしが

(五月雨・97・16)

聞かぬほどより五月蠅しの素振あらはるれば、与之助、汝はまだ子供のようと少し笑ひて身を進ませ

(はなごもり・40・15)

「身をなげ伏す」「身を進ませる」という動作の描写も見られた。「後姿」「立姿」「取乱せし姿」「悄然とせし姿」のような人物の様子を表現した描写や、「身をなげ伏す」「身を進ませる」という動作の描写は男女ともに見られる。

お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ

(にぎりえ・234・4)

「中肉」「背恰好すらりつとして」のような外見の体つきを描写したものが多くみられた。他にも「痩せている」「太っている」「骨太」などが見られ、「女相撲のような」といった比喻による描写も見られた。外見を描写した表現は多彩である。男性の描写には、「丈の高きもの」「背の低い人」「六尺の男」のように身長・背長の描写が多く見られ、男性の体格の特徴や、身長の高さによる男らしさを表現するものだと考えられる。他にも「骨たくまじき」「横ぶとり」「でつぷりと太て」などの表現が見られる。女性の体型の描写には、「痩せがれ」「背恰好すらりつとして」「女相撲のような」「肥太女」のように様々な語が使用されている。女性描写のほうだが、比喻を使用するなど人物の特徴と印象まで細かく表現されている。

また、女性の外見の描写には、「世の人のほめものにせし姿」「美しくい醜」「姿形うるはしき」など美しさを描写した表現が男性描写より多く見られた。

今度一処に写真を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透綾の荒縞で意気な形をして、角町の加藤で映さう

(たけくらべ・147・8)

「祭りの時の姿」「透綾の荒縞で意気な形」のように服装の描写も「体」の分類に含めた。「姿」「形」のような語が使用されているものに限定し、着物の様子のみの描写などは含めていない。服装の描写も多く、人物の外見から身分や様子を細かく描写している。

養父清左衛門、去歳より何処升処からだに申分ありて寐つきつとの由は聞きしが、常日頃すこやかの人なれば

(ゆく雲・195・10)

「からだに申分あり」のように体調を表わす描写も見られる。「体」の描写では外見、動作、人物の様子など、多様な描写が見られ、用例も身体描写の中で最も多い。一葉は人物の特徴や動作を表現するために、「体」の描写を重視していたと考えられる。

## ⑪肌

登場回数…51回

使用率…6.9%

「頬の皺」は「頬」の外見や状態を描写した表現とし、「頬」の分類に含めた。「肌」の分類には、他の特定の部位の描写ではないと思われるもの、直接「肌」「色」といった表現のあるものを含めた。「肌」の描写は女性描写に36例、男性描写に15例見られる。女性描写が多いのは化粧の描写が加わるためと思われる。一葉は「薄化粧」「紅白粉」「淡彩」「白粉べつたり」など、様々な語を使用して化粧の様子を描写している。化粧法には人物の身分や年齢、職業などが表われることもあり、人物の外見を読者に想像しやすくするとともに、人物の生活の様子までも想像させることが出来たのではないだろうか。化粧の描写の他に、「肌の色」に関する描写が、これは男女ともに見られる。

十五の春より不了簡をはじめぬ、男振にがみありて利発らしき眼ざし、色は黒けれど好き様子とて四隣の娘どもが風説も聞えけれど

(大つごもり・114・10)

「肌が白い」「肌が黒い」といった肌の色の描写は多く見られた。女性描写では「天然の色白」「雪白の肌」「雪はづかしき膚」のように色の白さを描写した表現が多く、男性描写には「色黒々と」のように色の黒さを描写した表現が見られた。女性は化粧の様子と

も合わせて、色の白さが美しさの基準であったと考えられる。それに対して男性は色の黒さで男らしさを表わすが、それは労働者の生活の苦勞を物語るものでもあった。「肌が白い」は女性や身分の高い人物の描写に使用され、「色が黒い」は男性や庶民的な身分の人物の描写に使用されている。

見る通り人間らしい色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事が無いに、夫ればかりでも身体の疲勞が甚しからうと思はれるので  
(うつせみ・222・16)

これは病の床にある女性の「肌」を「人間らしい色艶もなし」と描写し、人物の体調を表わした表現である。

「皺」も「肌」の描写に含むが、「肌」以外の部位についての描写としても使用されるため、本稿の分類基準では「肌」の用例としては見ることが出来なかった。肌の色によって人物の身分を区別したり、化粧の描写の違いによって人物の身分や雰囲気を区別して表現することができる。その表現は多彩であり、人物の特徴を表現するために「肌」の描写を重視していたと考えられる。

## 五 身体描写の比較と考察

使用率が10%を越えた部位は以下の通りである。

・「体」 登場回数：257回、使用率：34.8%

・「手」 登場回数：198回、使用率：26.8%  
・「足」 登場回数：103回、使用率：13.9%

最も使用率が高い部位は「体」であった。その用例数は身体描写の三分の一以上あり、特に多く使用されていたことがわかる。中でも体格や服装を描写した表現が多く、人物の外見の特徴を表わすことを重視している。「手」の描写は外見の特徴を表わす表現や感情を表わす描写もあるが、多くは動作の描写である。「足」には外見の描写は少なく、「涙」という語と合わせて感情を表現する用例や「足音」という描写があり、「足」の動作を表わす描写が多い。顔面描写と同じように動作が表わしやすい部位ほど用例が多くなる傾向があるようだ。「体」「手」「足」の描写はほとんどの作品において登場回数が多く、人物の身体描写において特に重視されていた部位であることがわかる。用例が10%未満の部位は以下の通りである。

・「肌」 登場回数：51回、使用率：6.9%  
・「胸」 登場回数：39回、使用率：5.2%  
・「腕」 登場回数：24回、使用率：3.2%  
・「肩」 登場回数：21回、使用率：2.8%  
・「背中」 登場回数：20回、使用率：2.7%  
・「腹」 登場回数：13回、使用率：1.7%

・「腰」 登場回数…12回、使用率…1.6%

・「臀」 登場回数…0回、使用率…0.0%

最も使用率の低い部位は「臀」で、1例も使用されていなかった。人物を描写する際に、一葉は「臀」に注目することはなかったのだろう。人物の外見の特徴を描写した表現は「肩」や「肌」の描写に多く見られる。「肩」の描写では体格を強調して表現する描写や動作によって感情を表現する描写が見られた。「肌」の描写には肌色の白さ、黒さ、化粧の様子などが描写される。「体」の描写で表わされた人物の体格や服装といった外見の様子を、「肩」「肌」の描写ではさらに細かく表わし、読者に人物像を詳細に想像させる。他の部位にも外見の描写や感情の表現は見られるが特徴的なものは少なく、動作を描写したものが多く。「体」「手」「足」の描写は、林七重氏の卒業論文「谷崎潤一郎の女性描写——身体描写の視点から——」と渡邊陽子氏の卒業論文「川端康成の女性描写の研究——身体描写の視点から——」でも用例の多い部位として結果が出ている。本稿では女性描写に限らず、人物の身体描写を対象としているので、「体」「手」「足」の描写は人物描写をするうえで重要な部位であるといえるだろう。渡邊陽子氏は川端康成の「手」の描写に注目し、「掌」「爪」「甲」など細かい部位にさらに分類して考察を行っており、特に動作描写が多いとしている。一葉につ

いても細かい部分まで描写され、動作描写も多いが、川端ほど特徴的で細かい表現は見られない。登場人物を描写するうえで、自分の好む部位や興味のある部位に注目して細かに描写するよりは、体の一部として外見や動作を補助的に描写するために使用されていたのではないだろうか。

顔面描写と身体描写を比較すると、全体の登場回数も顔面描写のほうが多い。人物の外見の特徴を描写する部位は「顔」「頭・髪」「体」などの大きな部位で、その他の部位はそれをさらに強調し補助する役割で登場人物個別の特徴を表わすために使用されていたと考えられる。感情を描写する表現は顔面の部位に多く、中でも「眼」「口」「眉」のように動かすことができる部位や、変化を表わしやすい「声」の描写に表われる。身体描写でも動きの描写が多い「手」「足」は感情が表現されやすい部位である。その他の身体部位は、一葉が特に注目していたと思われる表現は少ないが、作品の中の情景をより人物と密着させて描くためにその時々で必要な身体描写をしていたと思われる。

女性描写と男性描写を比較すると、女性描写のほうが男性描写よりも用例数が多く、用例の多い部位は「体」「手」「足」と共通している。「肩」「腕」「手」「足」の用例数は男性描写のほうが多

く、それは大きな動作が行える部位である。同じ部位でも女性描写では外見の特徴を表わし、男性描写では動作による感情を表わすなど、表現方法に違いが見られる部位もある。身体描写において、身長や肩幅といった体格を描写したものは、男性らしさを象徴し、「手」「足」といった動作の描写が多くなる部位は男性に多い。その動作によって感情を表わすものや、男性にのみ見られる表現もあった。男性の身体描写によって表わされる感情は、わかりやすい喜怒哀楽ではなく、表情に出さないように抑えられたような複雑な心情を表わしたものであった。一葉の作品には女性の主人公が多く、様々な女性を描いているが、主人公ではない男性についても同じように容姿や外見の特徴を描写しており、感情や動作の描写では女性以上に注目されていたと考えられる。樋口一葉の身体描写について、女性描写と男性描写の表現方法の違いを比較しながら考察をしてきたが、男女の描写方法を比較することでそれぞれの描写の特徴が浮かび上がり、一葉の身体描写全般についての特徴を見出すことができた。

## 注

注1 海輪春子「川端康成の表現方法―女性描写の視点から―」（東京女子

大学日本文学科平成八年度卒業論文）

## 注2

渡邊陽子「川端康成の女性描写の研究―身体描写の視点から―」（東京女子大学日本文学科平成十四年度卒業論文）  
林七重「谷崎潤一郎の女性描写の研究―身体描写の視点から―」（東京女子大学日本文学科平成十四年度卒業論文）  
宅野美穂「女性描写の研究―樋口一葉の文学作品を視点として―」（東京女子大学日本文学科平成十五年卒業論文）  
『人間装飾語辞典』現代言語セミナー編（PHP出版 一九八七年）  
身体描写の部位十一項目の設定の参考にした。

（ながみね まい 二〇〇五年日文卒）